

講演②

都からみた古代山城と城柵

講演者紹介

國下 多美樹（くにした たみき）

龍谷大学大学院文学研究科修了。（公財）向日市埋蔵文化財センター勤務を経て、現在、龍谷大学文学部歴史学科文化遺産学専攻教授。文学博士。専門は、日本考古学。

「都からみた古代山城と城柵」

龍谷大学文学部教授 國下 多美樹

はじめに

皆さんこんにちは、龍谷大学の國下と申します。よろしくお願いいたします。今日は、「都からみた古代山城と城柵」というテーマにさせていただきます。私が普段やっていますのは、古代の日本の都を考えるとということでございますので、私の調査研究の土台の都から今日のテーマを考えていうというようなことにさせていただいた次第でございます。

今日の話の構成は、まず、一番に日本の都、城、柵と題しまして先ほど先生の方からお話があったのですが、辞書的な意味でどのような定義ができるのかというお話をしまして、二つ目に都の宮垣と羅城の性格というお話をいたします。都っていうのは、いったいどのような壁で囲んでいたのかというのを具体的に考えていくわけです。その中からお城を囲むということと、都を囲むっていうのは少し比較する材料を得たいなというのが、実は狙いでもあります。そして三つ目は都からみた城柵と山城です。今日は、お手元にお配りしている私の資料の中に、年表のようなものをつけてございます。表1(①)(④)は平成二七年九月の鞠智城シンポジウムの岡田茂弘先生の講演の中から「古代日本東



西の城・柵略年表」という、まさに今日のテーマにあった内容の表がございました。それをちょっと借用させていただいて、その中に日本の都の変遷を入れさせていただきました。少し小さい字で恐縮なのですが、これもたまに見ていただきながらお話を聞いていただけたらというふうに思います。

さて、初めになんですが、お手元の資料の内容とほぼ文面同じものが流れていきながら、また関連する図や写真が画面に出てまいりますので、お手元の資料にメモをとりながらも結構です。お聞きただけたら幸いです。

まず、古代律令国家が成立しまして展開し終焉を迎えるまでおよそ三五〇年間あります。都はその位置と形、構造が、その間変化してきたわけです。それは七世紀、王権の拠点飛鳥の地に固定化した七世紀の終わりから八世紀にかけて、律令国家の政治体制を整えてきたわけです。そして八世紀の末、九世紀、長岡京の都、そして京都の平安京というふうに都の変遷があり、律令国家の体制の整備をしてきたのだけれど、結果的には一〇世紀には律令国家の体制は崩壊に向っていくというふうに、今、一般的に理解されているわけです。その中で都というのは「宮」と「京」という二つの空間を持っているわけです。で、そういった空間を持つて、しかも列島の中の中央部に一つの都というものを造ってきたわけですから、これは東アジアの中でも、一つ特質で

663	天智 2	8月倭軍、百濟白村江で唐新羅連合軍に敗戦（書紀）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
664	天智 3	この歳対馬・老岐等に坊人・倭を置き、筑紫に水城を築く（書紀）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
665	天智 4	8月百濟官人を派遣、長門国と筑紫国の大野・基修城を築かせる（書紀）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
667	天智 6	11月倭国高安城、讃岐国屋島城、対馬国金田城を築く（書紀）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
669	天智 8		7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
670	天智 9	2月長門に一城、筑紫に二城を築く（書紀）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
672	天武元		7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
677	天武 6	天武（672-671）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
679	天武 8	天武（672-671）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
682	天武11		7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
689	持統 3	持統（687-686）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
694	持統 8		7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
698	文武 2	8月大宰府に大野・基修・鞠智の三城を構治させる（統紀）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
699	文武 3	文武（697-707）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
700	文武 4	12月大宰府に三野・稻積の二城を修めさせる（統紀）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
701	大宝元		7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
709	和銅 2	元明（708-714）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
710	和銅 3		7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
719	養老 3	12月備後国茨城・常城廃止（統紀）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）
720	養老 4	元正（716-723） 2月倭人反し大隅国守殺害（統紀）	7世紀第3期 鞠智城Ⅰ期	郡山官衙遺跡Ⅰ期（7世紀後半～末葉）

表 1-② 古代日本の都・城・柵年表
 （岡田茂弘 2016「古代日本東西の城・柵略年表」もとに加筆）

西暦	和暦	天皇	西南日本 (出典)	主要官衙	勸習城	都城・畿内 (出典)	東北日本 (出典)	主要官衙
583	敏達12		この歳火震北国造の子、百濟達空日羅が倭国に召れ、国内要害に皇塞を築く等献言 (書紀)					
603	推古11	推古 (592-628)			小墾田宮に遷る (書紀)			
630	舒明2				飛鳥岡本宮に遷る (書紀)			
636	舒明8	舒明 (629-641)			岡本宮焼亡、田中宮に移る (書紀)			
640	舒明12				百濟宮に遷る (書紀)			
645	皇極4	皇極 (642-644)			乙巳の変 (書紀)			
645	大化元				難波長柄豊崎宮に遷る (書紀)			
646	大化2				改新の詔 (書紀)			
647	大化3	孝徳 (645-654)					この歳越国に淨足櫓を造り、櫓戸を置く	
648	大化4						この歳越国に磐舟櫓を造り、磐舟に備え、越・信濃の民を櫓戸に配置 (書紀)	
655	斉明元				飛鳥板蓋宮焼亡、飛鳥川原宮に移る (書紀)			
656	斉明2	斉明 (655-661)			後飛鳥岡本宮に遷る (書紀)			
					田身嶺に垣を巡らせ、兩槻宮を造る (書紀)			
					香山の西より石上山に至る溝を掘り、舟で石を運んで垣を作る (書紀)			
658	斉明4		この歳百濟国王・妃・太子が新羅の虜になる。国家が西北の畔りに兵を陣し城櫓を繕修 (書紀)				4月安倍比羅夫が饒田 (あぎた)・津代を征討 (書紀)	
							この歳都岐沙羅櫓造らに授位 (書紀)	
660	斉明6				石上池のほとりに須弥山を作り、廣愼を鑒応する (書紀)		く仙台郡山 I 期官衙造営> 3月安倍比羅夫、蝦夷・肅慎を征討 (書紀)	

表 1-① 古代日本の都・城・櫓年表
(岡田茂弘 2016「古代日本東西の城・櫓略年表」もとに加筆)

789	延暦8	桓武 (781-805)	6月征夷将軍胆沢城での敗戦を報告 (続紀) 9月征夷将軍、筋刀を進上し敗戦の 喚問を受ける (続紀) 7月大伴弟麿を征夷(東)大使、坂 上田村麻呂を副使に任命 (続紀) 1月征夷大將軍(大使)大伴弟麿に 筋刀を賜る (後紀) 6月征夷副将軍(副使)坂上田村麻 呂以下、蝦夷征伐 (後紀) 10月平安京に遷都 (後紀)	3月諸国軍、多賀城に介し賊地に入 る	多賀城 政庁Ⅲ 期(789 ~869)
791	延暦10				
794	延暦13				
802	延暦21	桓武朝 (809-823)	正月坂上田村麻呂に陸奥国胆沢城造 宮を命ず (紀略) 3月進志波城使坂上田村麻呂辞見 (紀略) 正月陸奥国中山藩初見 (後紀) 12月陸奥国出羽佐幕使文章編麻呂が 志波城遷置を建議し、許される (後 紀) 11月胆沢・徳丹の二城に藩・壻を収 納 (後紀)		
803	延暦22・				
804	延暦23				
811	弘仁2	嵯峨朝 (839-858)	閏2月肥後国菊池郡城院の兵庫の 旗が自鳴、6月再び自鳴、不動倉 11字が消失 (文徳)		
815	弘仁5				
858	天安2	文徳朝 (850-858)			
869	貞観11	清和朝 (859-876)	5月大野城の翌日、大宰府庫に准 じ交替検定 (三代格) 3月大野城衛卒40人の糧米を城庫 に納めさせる (三代格)	5月陸奥国大地震、各地被災、海水 多賀城下に至る (三美)	多賀城 政庁Ⅳ 期(869- 11世紀 中頃)
870	貞観12				
876	貞観18				
878	元慶2	陽成朝 (877-883)	3月菊池城院兵庫の戸が自鳴 (三 美) 閏5月新羅の賊、肥後国飽田郡に 襲来し民家を焼く (紀略)	3月出羽国夷俘反し、秋田城を焼く (三美)	
879	元慶3				
895	寛平5				
897	寛平9	宇多朝 (887-896)		9月秋田城の甲冑自鳴 (紀略)	

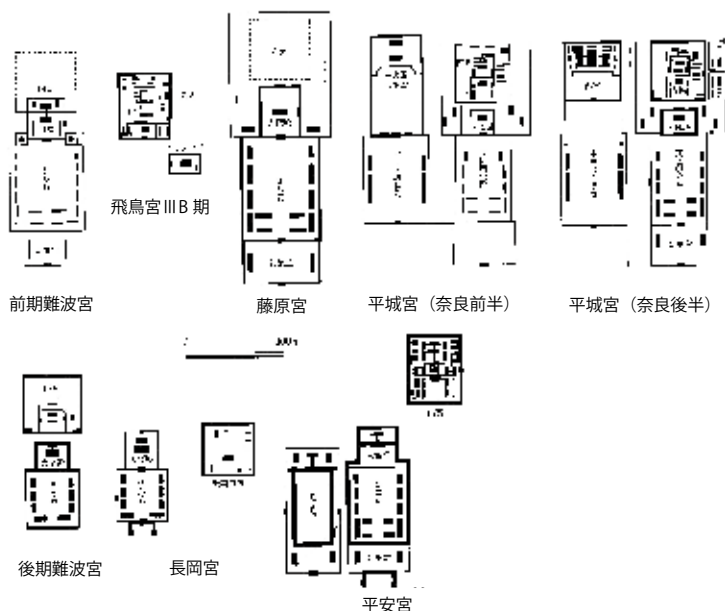


図1 日本の都における中枢施設（内裏・大極殿院・朝堂院）の変遷
(李 2018 を改変・加筆)

うな世界観というものを創ってきているというふうに見えると思います。

さて、日本の都なのですが、これはもうこれまでの研究で明らかですが、大陸の影響を非常によく受けているというふうに言われます。飛鳥時代からその影響を受けてきたわけですから、いかに我々日本という国が大陸、世界というものを意識してきたのかということがよくわかります。その変化というのは、まさに宮の形に現れているわけですね。今日の私の資料の中にも宮殿の図が、実は並べてございます。図1です。実は、宮殿ごとに形が違うということは一目でおわかりいただけるかと思いますが、ちょっとこの話は、討論のときに使わせていただこうかなと思います。こういうふうな形で変化しているのだ

なあとということがお分かりいただけると思います。基本的に規模が大きくなって、整備され整っていくというような変化で説明できます。一方で、そういった律令国家の中央の変化とは別に、中央政権というのは各地方に対しての政治を行ってきたわけです。それが今日のテーマであるところの東北の城柵であり、あるいは西日本、西南日本にある山城であるということなんだろうと思います。そういう意味では中央、列島の政治史というものをまさに反映しているし、外交史も反映しているというふうに見えていいんだらうと思います。

一 日本の都・城・柵

さて、古代の山城と城柵を都から見るとどのように見えるのかというのが私のテーマなのです。私の報告は都における「宮垣^{みやがき}」と「羅城^{らじょう}」の性格をまず確認してまいります。その上で古代の山城や城柵と比較して律令国家がどのようにに地域支配、国家の支配というものを進めていったのかということに結びつけていけたらというふうに思っています。まず一番、日本の都、城柵というテーマです。都とは、都城というふうな表現もあったり、あるいは、宮都とも表現されるわけですが、いわゆる都とは天子の住居のある集落というのが原義、元々の意味であると、和訓での都は宮、つまり「宮」という字と、その場所を表す「処」がついたものであるというふうに、岸俊男先生が述べられたわけですが、これは非常に分かり易い。つまり、天子がおられるその居所とその辺りというのが都の原義で

あるということなのです。先ほど熊谷先生が詳しい話をされたのでやりにくいのですが、これは教科書的なというか辞書的な説明なのですが、城・柵という言葉ですが、辞書で調べますと「城」というのは内側が城、外を郭というふう呼び分けている。実は「キ」という、熊谷先生がおっしゃいましたが、都という意味もあるということなのです。で、「城（じょう）」、「城（キ）」というのは防御のための砦というのがもともとの意味であると、そうすると城柵という言葉が出てきたのですが、砦と同じ意味で敵に備えるための土を重ねて造ったお城であるということです。一方、「柵」っていうのは丸太を並べたそういった施設。矢来^{やらい}であるというふうに定義がされています。こんなふうには、まずは定義のところを少し見ていくわけですが、実際には、先ほど先生がおっしゃったように歴史という流れの中で、それぞれの持っている意味というのはたぶん変わっていくのだろうと思います。そのあたりは、文献史料を使いながら説明していくのが正しい方法だろうと思います。

しかし、今の原義なのですが実際には軍事的な性格というのが城柵にはあるわけですが、実際には政庁域というものが伴う。政庁域っていうのは先ほどお話してくださったように儀式、儀礼を行う場でありますから、軍事的な性格ということでははっきり言って無関係にも思えるわけですが、これが実状なのです。それから山城というのも、今日のテーマである鞠智城のような、少し内陸に入ったところに造られて、しかも今日のテーマで議論されますが官衙、お役所のような性格をもっているということになりますと、単純に言葉だけの意味を持ってそれぞれの施設というものを見るわけには

いかにんじゃないかということになります。つまり、一言でいうと都と山城、それから城柵っていうのは多様な要素を実は持っているところがあるが、いわば日本独自の構造というものを持っているというふうに説明できるだろうと思います。次のお話に移ります。

二 都の宮垣と羅城の性格

では、日本の古代の都の宮垣と羅城について文献史料と、少し遺跡の発掘調査の資料を見ながら、どのように今、考えられているのかということを見てまいります。『日本書紀』の天武五年（六七六年）には、「新城に都をつくらんとす」と書かれてございます。実は新しい城というふうに書かれているわけなのですが、この新城なのですが、天武十一年（六八二年）にも出てまいります。たびたび登場するわけですね。そして持統五年（六九一年）、持統八年（六九四年）には「新益京」、新しく益した京と書いて「あらましのみやこ」と呼んでいます。表現されました。持統八年には、皆さんよくご存知の藤原京という表現が出てまいります。つまり、同じ場所に作られた都に対して、違った表現がされているということになります。これは議論がまだ続いているわけで決着を見ているわけではないのですが、一つの都に対しての表現にお城という字を使っているということは、少し注意しておく必要があるだろうと思います。有力な意見だと思えますが、飛鳥にもともと宮殿がありましたから、飛鳥のすぐ北側にできた広大な都市、つまり新たに造った「城」である。新たに益した都であるとい

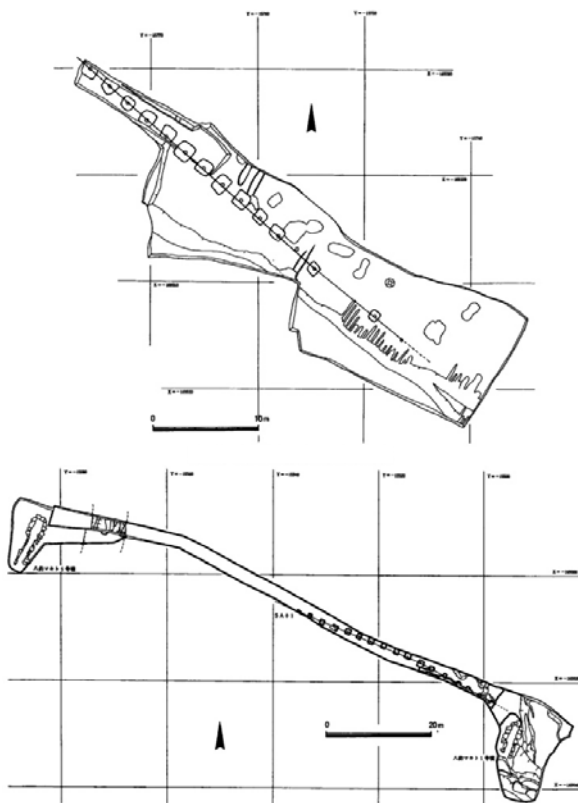


図 1 上 酒船石向イ山地区 (明日香村 2000)
下 八釣マキト遺跡 (明日香村 2001)

うような意味だろうと解釈される。飛鳥を中心に調査されている相原嘉之さんの意見に私は同調しております。

つまり、そのような形で都の中でも、実は「キ」という表現が出てくるといふことなのです。実は、「飛鳥」と「飛鳥の周辺」の発掘調査をしていくと、まるで防御施設かなと思わせるものが見つかってきたわけです。例えば、図1です。何が明らかになったのかといいますと、柱が並んでおります。図のように一本柱塀が出てくるといふことなのです。しかも、丘

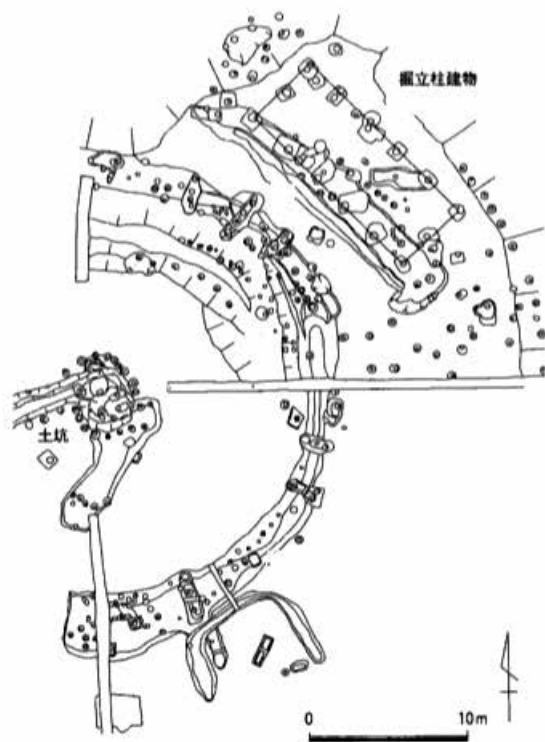


図 2 森カシ谷遺跡 (高取町 2003)

の上から出てくるということな
 のです。丘の上でこういった一
 本柱の堀が出てくるというのは
 異常ですよ。それをどう評価
 するかということなのです。そ
 れを評価していくのは飛鳥周辺
 だけじゃなくて、飛鳥から和歌
 山に繋がる道上でも、高取町
 というところからもこのような
 不思議な施設が見つかった。図
 2は森カシ谷遺跡です。ここで
 烽、つまり烽火^{とびひ}を上げた跡だろ
 うと思えるような遺跡が見つ
 かっているわけです。そうしま
 すと、飛鳥を中心とした飛鳥時
 代の宮殿、あるいは都を防御す

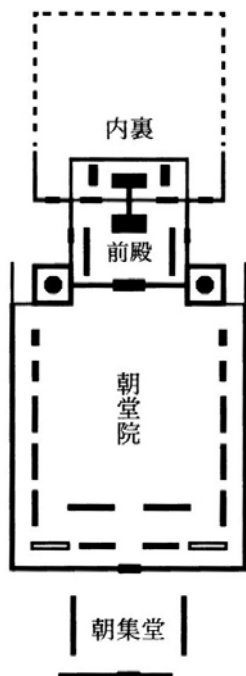


図4 前期難波宮
(植木久『難波宮跡』2009
掲載図を再トレース)

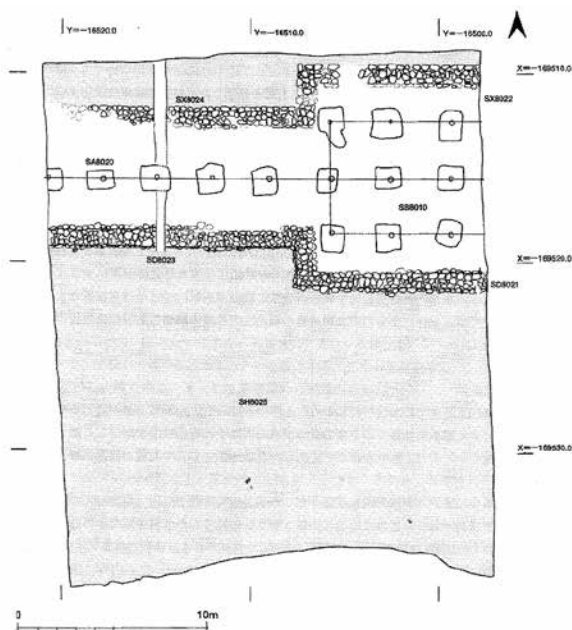


図3 飛鳥宮Ⅲ期(斉明朝～天武朝)
内郭南門と1本柱塀
(飛鳥宮跡Ⅲ 2008より引用、加筆)

るための施設というものが、もしかすると周りにあるのではないか、あるいは交通の要所にこういった烽というものが造られたのではないかというような推測が当然成り立っていいわけなのですが、まだまだ実は事実関係といえますか、発掘調査の情報が足りない。まあ一つの視点としては、都を守る施設もある可能性があるのだということを知っておく必要があると思います。私は少しまだ慎重な意見です。

宮垣と一本柱塀

さて、宮垣と一本柱塀というところに入りますが、『日本書紀』の皇極四年の六月に「法興寺に入りて城と備う」とい

う記事が出てまいります。先ほどご紹介がありましたがお寺というものが防御施設として使われたということなのです。つまり、寺院というのは、当初から築地ついでという土塀を導入してございます。ただ、お寺が土塀を導入していますが、宮殿の方はいえど土塀ではなくて、塀なのです。一本柱の塀なのです。掘立柱の柵が宮殿の実建築様式として、それが取り入れられるのは平城京の都からというふうに分かっています。図3の絵は飛鳥宮のⅢ期、齊明天皇の時代と天武天皇の時代の宮殿の内部にあった内裏の南の正門です。一本柱の塀がとりついている。これこそが、宮殿の内部を区画する施設である、そしてちょうど飛鳥に都があったときⅠ期、孝徳天皇の時代に大阪の中央区の法円坂のところに難波宮と呼ばれる宮殿が造られたわけですね。そのときの宮殿は、発掘成果で図4のような絵が描けるところまでいきまして、これで何がわかったのかというと、いろんなことがわかったのですけれども、南側を掘立柱で、あの複廊になっていると、複廊というのは複数の複に廊下ですから、廊下が二つあるという施設になります。宮城の南側については荘厳化しているということがいえるだろうと思います。飛鳥時代に一本柱塀というのや、あるいはこういった複廊というような塀で構成されるという変化が起き始めるわけですが、それが本格的な都市を備えた藤原京の中心部にいったらどうなるかなんですが、実はこれは藤原京でわかったというよりも、平城宮の発掘調査でわかったんですね。平城宮では、平城宮の内裏・大極殿というところの回廊を発掘したら、図5のような木材加工したものが出てきたわけですね。それは実は藤原宮から持ってきたものであるということが、ほ

ば推定されているのですね。藤原宮の南側にあった朱雀門の東西の一部区間が単廊、廊下が一つだけのもの、あるいは二つだけの複廊形式であったということなのですが、それがとりついていく。こういうふうな木の塀なのですね、木の柱で土壁を持った塀であるということなのです。

つまり、これは宮殿を囲んでいる塀の形であるということが、平城宮の発掘で明らかになったということなのです。お手元の資料にも書いてございますが、地面から五^ト超えるぐらいの高さです。五^ト超えますので、ちょっと乗り越えようなんてことは当然できません。ですので、単なる壁というよりは、やはり、外側と完全に隔絶して中に入れないような、そのような壁を作っているということだろうと思います。さて、文献史料をちょっと見ていくのですが、史料1と2です。まず『日本書紀』の大化四年、六四八年の三月に

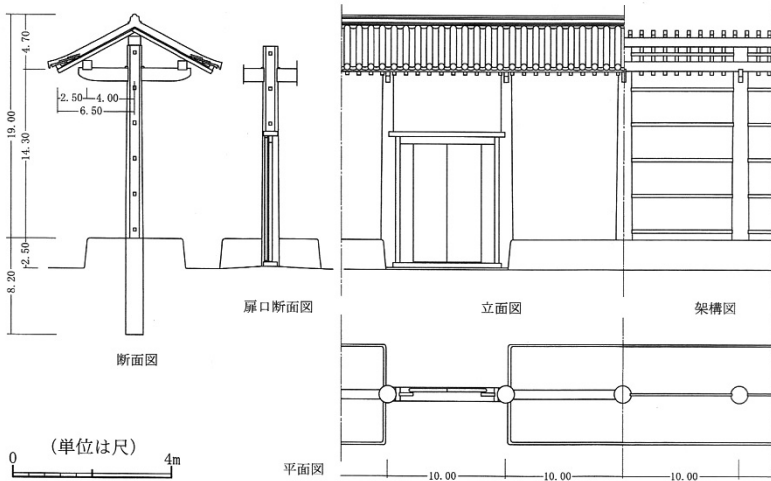


図5 平城宮出土木槌から復元された藤原宮の1本柱構造の宮垣
(平城宮XI報告を再トレース)

(史料1)

三月乙巳朔辛酉、安倍大臣薨。天皇幸_二朱雀門_一、举哀而慟。皇祖母尊・皇太子等及諸公卿、悉随哀哭

『書紀』大化四年(六四八)三月条)

(史料2)

三年春正月壬子朔、(中略)。左將軍正五位上大伴宿禰旅人、副將軍從五位下穗積朝臣老、右將軍正五位下佐伯宿禰石湯、副將軍從五位下小野朝臣馬養等、於_二皇城門外朱雀路東西_一分頭、陳_二列騎兵_一、引_二隼人・蝦夷等_一而進。

『統紀』和銅三年(七一〇)正月朔条)

は「朱雀門は出御の場であり天皇の日常空間と非日常空間の境界の役割を担った」ということを、この記録から読み取ります。安倍の右大臣の阿倍の大臣が亡くなるのですね。亡くなったことを契機に天皇が朱雀門にわざわざ出てくるわけです。出てきて、そこでこういった^{こあい}拳哀の記事を挙げるわけですから、つまり、天皇にとって「朱雀門」というのは日常空間と非日常空間の境目になっているという意味がある。

もう一つの史料2は、和銅三年、都は平城京に移ろうとしていたそのときに、平城宮の朱雀門に

至って隼人・蝦夷に対して国家を示威する場になっている。つまり、この史料の上に並んでいるのは左將軍からはじまった大伴宿禰旅人以下、いわゆる軍人が軍家が名前を上げています。彼らがどこに立ったかというと皇城門。皇城門というのは、いわば朱雀門の外側の、ようは羅城に相当する門です。羅城の外側はどうなっているかというのと、「下ッ道」という道があるわけです。朱雀の道になります。宮殿の真南の大通りに左右に分かれて立つわけです。何のために立ったかというのと、それは隼人・蝦夷らが進んで宮殿の中に、天皇にお礼に、会いにくるのを、そこで迎えておるわけです。

築地の導入とその後

つまり、そのような場として朱雀門は意味がある。こんなふうに見ていくとも宮殿というものの正面側にある塀というのは、やはり意味がどうもありそうですね。単なる入り口ではなくって、そこは外から入ってこられる方に対して何か示威する場というふうに考えるのが自然だし、そのように考えられています。実は、平城宮で初めて築地が造られたことは、平城宮の発掘調査で裏付けられています。まず築地なのですが、土を版築して版築というのは厚さが五センチ程度、少しずつ土を入れながら突き棒で突いて叩き上げる方法です。それで屋根を葺きあげた。そういった構造のものです。私たちが現在、見ることができるのは法隆寺がありますね、法隆寺に行かれたら重要文化財になっている壁がまさに築地なのです（図6）。ああいったものが平城宮から採用されていくというこ

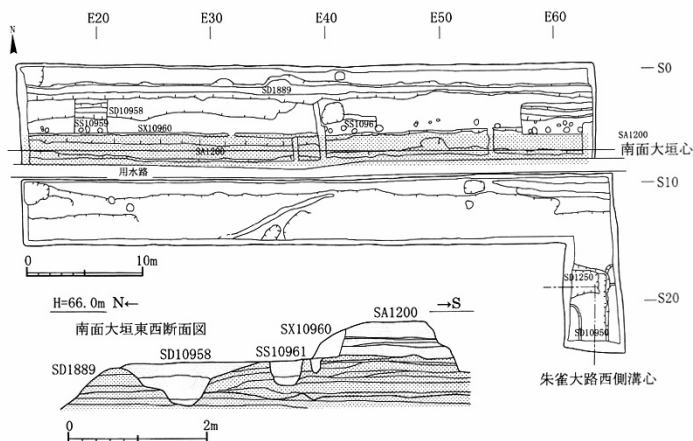


図7 平城宮朱雀門西方南面大垣遺構図
(平城宮概報 1983 を再トレース)

とが分かっています。右側は平城宮の発掘調査報告書から引用しました(図7)。今、朱雀門ができあがっています。その真下のこの部分が土塀のあったことを示す部分、この直線的なアミがかかっているところが朱雀門に、とりつく塀の痕跡ということになります。つまり、私が強調したいのは宮殿というのは「宮垣」、つまり垣があるのだということなのです。飛鳥時代は塀、木の塀であると。それが奈良時代、平城宮にいたって築地という構造のものになったということがわかります。史料3には和銅四年、平城京に遷都したその翌年の記事を載せています。宮垣が、つまり、壁がどいういう意味を持ったのかということがわかります。宮垣がまだできていない。

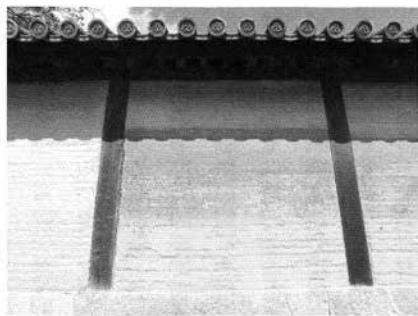


図6 法隆寺西院南面大垣
(國下撮影)

(史料3)

丙子、勅、頃聞、諸国役民。勞_二於造都_一、奔亡猶多。雖_レ禁不_レ止。今宮垣未_レ成、攻守不_レ備。宜_下權立_二軍營_一禁_中守兵庫_上。(後略)
『続紀』和銅四年(七一一)九月丙子条

(史料4)

是月、初置_二關於龍田山・大坂山_一。仍難波築_二羅城_一。
『書紀』天武八年(六七九)十一月条

(史料5)

壬辰、廢_二河内国高安烽_一、始置_二高見烽及大倭国春日烽_一、以通_二平城_一也。
『続紀』和銅五年(七一二)正月二三日条

(史料6)

己卯、新羅使入京。遣_二從六位下布施朝臣人。正七位上大野朝臣東人_一。率_二騎兵一百七十一_一。迎_二於三橋_一。
『続紀』和銅七年(七一四)十二月二六日条

壁が工事中なので「攻守を備えず」と書いてある。つまり、どこから軍事的な攻撃を受けたら、それを守ることができないということなのです。ですので、武兵をたてると書いてありますから、それなりの防御施設だということはこういった史料からわかります。

実は平城宮の大垣、つまり宮殿の築地は発掘で、土塀の一番下の幅、基底幅というのですが、そこが二・七mあります。非常に大きい。高さは推定五・六m、実は藤原宮

の壁の高さと同じ高さになるのですね。ですので、これはやはり何か伝統的に宮の垣っているのには意味があるのだろうというふうに思います。

難波の羅城

話は「羅城」に移ります。羅城といえは羅城門。しかし、私たちが、都を研究する者にとって、都の周りにそういった羅城的なものがあるのかどうかというのは、ずいぶんと関心事でありました。というのもこの史料4と5、防御的な記載が『日本書紀』あるいは『続日本紀』に書かれているからなのです。史料4には難波に羅城を築くというのが、天武八年の一月の条『日本書紀』に出てまいります。どうも難波宮を取り囲む羅城があったということになるわけですが、いろんな議論が進んでいる。まだ研究途上、調査の方も少し途上だろうと思いますが、一つの有力な候補が宮の北西辺りで見つかりつつある。見つかったのが一本柱塀なのですね。ですので、飛鳥の宮殿、あるいは藤原京ともよく似ております。もう一つ史料5です。高安、大阪ですね。河内の国、高安とか奈良県にかけて、烽、つまり、「のろし」を上げる場所があったということがございます。こういった文献記録しかないので実際にあったかどうかというのは、これから検証する必要があります。しかし、都を守る施設っていうのは、ある可能性があるのだというふうに思っていただけだと思います。

平城京と長岡・平安京の羅城

さて、時代は奈良時代から奈良時代の終わり平安時代にいきまして、羅城はどうなったかなんですが、平城京の場合には平城京の南側に発掘調査をしまして羅城門の一部が発掘されました。さらに、その南側も発掘調査をしたら平城京を覆っているのは、南北が九条じゃなくて十条だったんじゃないかというような成果も明らかになりました。当時は下三橋遺跡というふうに呼んでいて、それが今では「平城京南方遺跡」と名称が変更しました。しかし、この三橋という地名は現地にもございまして、その三橋っていうのが史料6に出てきます。新羅の使いが平城京に入ってくるときに、布施朝臣人あるいは大野朝臣東人が、一七〇人の騎兵で迎えにいったところが三橋であったということなのですね。その三橋こそ羅城門を出た南側のところだろうと推定されている。佐保川という川が今ありますが、そこに三つの橋が架けられていたという説が、それが地名の由来であろうと。つまり、この記事は宮殿の一番南端の、京の南端の門を出たところで外国の使節を迎える場になっているということの一つ知ることができる事例なのです。

ちよつと昔、大和郡山市さんが発掘調査されているときに私がスナップ写真撮らせていただいたので、今日出させていただきます（写真1）。二〇〇五年の九月一六日撮影です。これが羅城であります。二本の柱が並走して走っております。こういったものから、いったいどういう塀が復元できるのかっていうことについて、議論が別れているわけです。図7は、明治大学の大学院の井上先生の復

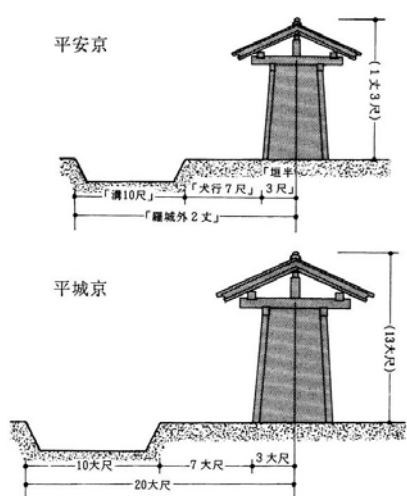


図7 平安京と平城京の羅城
(井上和人『日本古代都城の研究』2008)

平安京に引き継がれていくということになるわけですね。と思っていきましたら平安京で羅城が見つかったと、この会場の中でも平

元を載せてございます。下が平城京、つまり右の絵から復元している、上が平安京、これからお話する平安京。羅城っていうのが、こういったまるで土塀のような壁である、問題は中に土が入っているのか入っていないのか、これはよく分かってないのです。とにかく、こういったものを想定しています。井上先生によると基準尺が違うだけで、基本的に設計は同じだというふうにお話されています。つまり、羅城というのは遺構としては平城京から確認できて、それ以降、設計そのものは平安



写真1 平城京の羅城跡 (大和郡山市調査、國下撮影)

安京の羅城の発掘調査の説明会に行かれた方が、たぶんおられると思います。およそ千人ぐらい、全国からいらつしゃっています。平安京九条路、羅城の調査成果ということで説明会の資料からこれを引用させていただいていますが、ここに羅城の土の壁の一番底の部分が見つかったわけです。さらに、その北側は本当の都の南端の通りである九条大路です。この成果は、平安京にも羅城があるということとは文献資料には書かれていたけれども、それをはつきりと遺跡として見つけることができたということで、非常に重要な成果でした。しかも、平安京の南の端、右京の九条二坊、九条三坊の四町ですか、その当たりまで広がっているということがわかってきたという非常に重要な成果があったのですね。

三 都からみた城柵と山城

政局による城柵と山城の変化

さて、本題というかそろそろ本当に話をすべきところに行くのですが、「都からみた城柵と山城」というところです。実は結論からいうと都は、今日のテーマである東北の城柵と西日本の山城のちょうど中間位置にあるということでありますから、実は当時の律令国家にとってみれば、いかにその当時の政局あるいは外交関係というものが変化していったのかということを俯瞰できるいい場所にある。そのあたりを見ていきたいと思いますと思うのですが、古代国家の主たる都を中心に七世紀から九世紀の史

料を通史的に総比較するということで、表1をご覧ください。

まず私の主題は都ですが、どこが中心地にまず確定したかという「飛鳥」でした。この表では、推古朝あたりからはじめてございますが、推古朝あたりに飛鳥の中心地、飛鳥盆地、小盆地の中におはりだのみや小墾田宮というものを造っていくわけです。以降、飛鳥が宮殿の中心地として使われていきますから、推古朝では少なくとも都というのは固定したんだということなのです。ちょうどその頃、東北、西日本がどうなっているかあまり資料がない。ですので、これはもう発掘調査するしかございません。このあたりの時代のことは、今日ありましたがこの遺跡の表の右側のあたりに書いてある東北でしたら郡山遺跡とか、その前身となる遺跡はないのかっていう、そんなところを見ていかないといけないと思います。そして、東北に一つの経営拠点を創っていくのが孝徳朝でありました。孝徳朝の東北経営において淳足^{ぬたりのさく}柵というものを造っていくことになります。そして、柵戸^{きのへ}、まあ移民政策を進めていくという意味で、一つの画期が孝徳朝にあるというふうに思います。

そのあと以降も、宮殿は大きく変わることなく飛鳥を拠点に進めていきます。ここで政治が行われたわけですが、斉明天皇の時代、戯れの天皇ともいわれた斉明天皇の時代には、阿倍比羅夫の東北遠征が始まります。そろそろ古代国家は、東北に対しての関心を持ち始める時代なわけです。表1の2ページの部分です。そして、鞠智城の造営の契機になった白村江の戦いというものが左上にありました。ちょうどそのときに天皇は天智天皇になります。都は大津宮に都がございました。滋賀県の大津

市に都がございました。その中で天智朝の間に西日本の各地に山城が造営されていくということです。から、まさに天智朝における大きな動きとしてこれは捉えておかないといけない。一方、東北の方はちよつとあんまり史料がないということなんです。まあそんなふうに同じ時代なんだけど、東北と西日本というものは、同じ国としての動きがあるはずなのに、同じような史料が残っているかというともうでもない。ということがここに読み取れてきますね。

さて、本格的な都ができたのは天武、持統朝の藤原京なんですが、藤原京ができあがったのが持統八年のことでありました。ちょうどその頃、東北では先ほどお話があった郡山官衙遺跡が、これは仙台市にあるお役所のような施設ですが、最初に木柵塀が作られ始めたという話がありました。これは天武、持統朝における政策と関係付けて、地方政策と関係付けて見ていく必要がやっぱりあるのだろうと思います。そして、この間で左側には、つまり、西南日本の方に冒頭にお話のあった大宰府に命じて大野城、基肄城、鞠智城の三城を修復させるということがあったわけです。地方の役所であるところの大宰府に命じて修理させているということですが、どこまで国が関与したのかって問題もちよつと気になるところですね。その中、鞠智城のⅡ期に位置づけられるわけですが、まさに鞠智城の内部が整備されていく時代であったということになります。表1の2ページの終わりから3ページ目の部分です。時代はもう平城京に移っております。養老四年、七二〇年、三月に大伴旅人を征隼人持節大將軍に任命、隼人というのは九州にいる地元の方々なんです。それに対しての手当もしはじ

めている。九州に目を向けている。一方、東北では謀叛が、始まると。なかなかうまくいかないわけですね東北経営が。そんな中で東北経営として、これは熊谷先生がおっしゃっている神龜元年体制というふうに呼ばれているんです。七二四年四月、藤原宇合を征夷時節大將軍に任命しているんです。東北においては「多賀城」を置くという大きな事件があったわけですね。それまでの政庁を引き継ぐ形で、たぶん多賀城に本格的な拠点が作られていくという。七二〇年の「蝦夷の反乱」以降、東北においてはいわゆる「柵」と呼ばれる施設が、悉く陸奥国に建設されていくわけです。東北に対してのこ入れが進んでいく様子が見えてきます。

平城京に遷都するのが七一〇年、平城京は七八年間なんです、非常に長い都です。聖武天皇の時代に都をしばらく「恭仁京」に移したり「紫香樂宮」に移したりと、奉公五年と呼ばれるような時代を経て、また七四五年に平城京に戻ってくるわけですが、奈良時代の後半になりますと、藤原仲麻呂が当時の実権者として登場して東北の経営に乗り出す。そのときに桃生城、あるいは雄勝柵というのが記録上出てくるし、伊治城というのも出てくるということになるわけです。こんなふうに見ていきまして最後、表1・③・④を見て下さい。私の専門の領域なのですが桓武朝というときに、一つ大きな転換点があったというふうに考えられています。桓武朝は造宮と東北経営の時代であると、経営の時代、征夷の時代であるというような表現があるように、東北に対しての様々な軍備を増幅して送っていく、作業をしていくわけですが、しかし、なかなか都が長岡の地ではうまくいかず「平安京」に都

を移した。その年に有名な坂上田村麻呂が凱旋してくる、というような結果を生むわけです。今日話にあった近畿大の鈴木さんと、彼が学生の頃、東北と一緒に回った記憶があるんですが、今、そのように彼が言っているのは、この坂上田村麻呂の凱旋は平安京の遷都を祝うためにやったんだという、そんなこともおっしゃっている。たぶんあたっていると思いますが、そういうふうに合わせて都に対しての凱旋報告をしていくということまでやるわけです。そこには、東北あるいは西南に対しての、地方に対しての政治っていうものに対して、いかに当時の律令国家の中央の方々が目配りをしていたのかということをよく示す出来事だろうと思います。

儀礼空間の影響

儀式空間の影響というものを、レジュメにまとめています。結局、宮というものがいったい地方の城柵や山城と、どのように関係するのかというところ。つまり、これ政治ということが一つそうなのでしょう。律令国家で大切なのは、「儀式」をやるということなのです。それで、私、東北に行ってみいました。皆さんも多賀城、素晴らしいです。今、工事されていますが、ぜひとも行かれてみてください。右側は、胆沢城^{いさわ}。左側は多賀城の政庁の南大路ですね。ちゃんと坂道になって凛々しく政庁城が一番高いところにあるんですね。そんなふう to 場所を選んで造っているということなのです。胆沢城の壁、まさに築地です。築地の壁にしています。門も非常に立派でした。こういったものもや

はり宮殿の歩みとともに、東北あるいは九州にある、中四国にある、そのような施設は影響を受けているのだということを眼前で確信を持って帰ってくる事ができたわけです。

おわりに

今日は都から古代山城と城柵を見るということで、律令国家という国家がどのような政策を取っていたのかということを見てきたわけですが、基本的にはやはり体制維持で版図拡大していくということが一つ重要であると。で、外交関係というのも当然重要なんですが、西日本に分布する古代の山城については飛鳥時代以降、大陸との外交関係についての意識というものはつきり出ている。さらには、その中で軍事的緊張が起きれば、またたくまに城を造り上げるぐらいのエネルギーはあるということなんです。それは、「水城」であり、「山城」であり大宰府であり、そして鞠智城であるということだろうと。一方、東北の城柵については国家というものが地域をどのように支配していったのかという原理を読み取ることができる。蝦夷への、東北への



写真2 多賀城跡政庁南大路（南から、國下撮影）

版図拡大っていうのは、一定の防御制を備えている。一定の防御制ということで完全防備じゃないんです。一定の防御制を備えて、政治支配の拠点となる城柵を造ることが目的であると。城柵の政庁、つまり、中心的な施設というのは都の宮殿と系譜的につながっているという意味で行政庁と外観重視の儀式空間を作っていくという意味では、国家権力というものを、ミニチュア版でそこに作って地方の支配をするための道具にするというふうに説明していいんだろうというふうに思っています。

以上で私のお話を終えさせていただきます。ありがとうございました。